

注目される?



評論家の福田和也さんは精神科医の香山リカさんとの対談を収めた近著『「愛国」問答』(中公新書ラクレ)のあとがきで、対談の始終をあしきまに書き話題になった。所は暴力団組長が射殺され話題になったホテール。ほぼ初顔合わせの著者同士。コーヒール杯3時間喋っただけで終了を告げられたあげく、空き腹のまま、夜の街に放り出された。

### 「もう一つの作品」力注ぐ

「予算はなぐてもやりようがあるのではなから」その後、さすがにもう一度香山さんと話をさせてもらったが、会場は香山オフィスという経費節約ぶりの「本書を賞しき」についての対話と思

## 恨みじらみも… 「あとがき」熱く

巻末の1、2ページを使い、謙遜にくるんで苦勞話(自負を披露、締めは脇力者や編集者への感謝…)と相場が決まっていた本の「あとがき」に、「このころスリリングなものが目立ってきた。出版社や編集者への恨みつらみ、世間に対する私憤。時には過剰とみえる謝辞が並ぶ。本文とは別の作家の顔が透けて見え、読み手をキョッとさせるものも。」(藤生京子)

うと皮肉っている。

評論家の大塚英志さんが3年前に出した『木馬日記』(角川書店)で、あとがきに「出版社には別に感謝しませんが」と書いて、別の本で出版社の経営戦略を批判したりして編集者を「泣きぞうな顔で帰らせた」(大塚さん)ケースなどもあるが、(2)まで舞台裏を暴露するものではなかった。

ラクレ編集部によれば、手短かに対談を終えたのは、イラク戦争にあわせて緊急出版したかったから。しかし福田さんは「本作りが雑すぎ。読者に報告すべきな」と思った。当初は編集者の意欲不足など、より厳しい文言が並んでいたが、編

集部から削除を依頼され、出版に至った。

読者という世間にならうぶんをぶつけるのは文芸評論家、小宮野敦さんの近著『反文藝評論』(新曜社)。いわんも

「怒れない」青年「ブルドと芥川龍之介に似

てい」など、1/6半のあとがきの大半をその描写に割いている。

評論家の勢浩浩爾さんは、昨年刊行された『また大学院生を「バカ」呼ばわりし「隣の火事より怖い」と言い放す』

「ホームページを持たない書き手としては、あとがきを活用しない手はない」と小宮野さん。謝辞といえども目が離せない。哲学者の中島義道・電気通信大教授は、近著『怒る技術』(PHP研究所)で、企画を持ってきた編集者について「色目(物静か)で化粧品

のセールスマンのような「怒れない」青年「ブルドと芥川龍之介に似

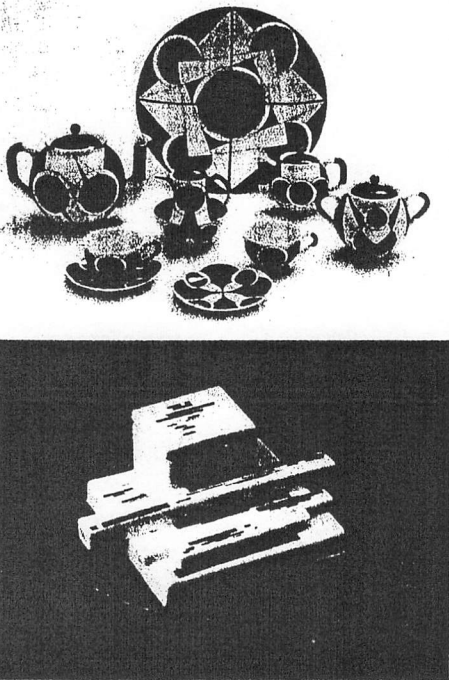
てい」など、1/6半のあとがきの大半をその描写に割いている。

評論家の勢浩浩爾さんは、昨年刊行された『また大学院生を「バカ」呼ばわりし「隣の火事より怖い」と言い放す』

「ホームページを持たない書き手としては、あとがきを活用しない手はない」と小宮野さん。謝辞といえども目が離せない。哲学者の中島義道・電気通信大教授は、近著『怒る技術』(PHP研究所)で、企画を持ってきた編集者について「色目(物静か)で化粧品

のセールスマンのような「怒れない」青年「ブルドと芥川龍之介に似

## 日用品もアバンギャルド



買に巡回

帝政ロシア末期からソビエト連邦初期に花開いた、文前書芸術運動ロシア・

00点を展示している。

あ。ロシア革命(1917年)を背景に、新しい芸術運動が日用品にま

品も紹介する。

原則土曜日の午後3時〜5時30分。要予約

「自由」テーマ 人間学講座 来月、東京でアカデミズムの枠を超えて人間や社会について考える連続講座「人間学アカデミー」の第3期が、9月20日から東京・元麻布の麻布学園で開講する。「人間はどの程度「自由」か」をテーマに、6人の講師が各3回ずつ講義する。

呼びかけ人は評論家の小浜逸郎さんら。今回は橋爪大三郎さんの「アメリカ論」や小宮野敦さんの「恋愛という不自由」などの講義がある。

◇文化総合面は毎週火、水、木曜に掲載します。